

詩人倉橋惣三先生



上 沢 謙 二

今回、坂元、及川、津守三先生が編集委員となって「倉橋惣三選集」全三巻が、フレール館から出版された。先生がわが国保育界における先覚者であり、指導者であり、創成者であることは、今更いふまでもない。

先生の文章を読むと、どんな短かいものからも、必ず教えられるところ、得るところがある。「咳唾珠玉をなす」ということばがあるが、先生の文章は正にそれに当たるところ。感想、随筆はいうに及ばず、論文でも、学説でも、趣きがあり、うるおいがあり、美しさがある。時には、詩を読んでいような気持ちになる。これは他の追隨しがたい先生独特の境地であると思う。

こころみに二篇をひく。

「B先生の顔は見る見る蒼白味を帯びてきた。目には涙がいっぱいになっている。春子がいつものズルを出している。B先生は春子のこの卑しい性癖について、なににより憂えているのである。どうにかなおしてやりたいと始終苦心しているのである。この次こそうんと叱ってもみなければならぬとも、いつでも思っているのである。けれど、その場になると、目の前にいつものズルイ性癖を見せつけられると、小言も、矯正法もどこかへ行ってしまう。ただ、身が立ちすくむようになるのである。B先生は指先きをふるわせなが

ら、急に春子の手を握った。そして無言のまま裏庭へ連れていった。そこには、大きな古い樹があった。B先生は春子を押しつけるようにして、自分もその樹の根にすわった。春子はおどろいて目を見張っている。その春子の肩を抱きしめて、B先生は頭を垂れてすすり泣きに泣いた（幼稚園雑草より）

「掃き清めて、その一日を待ち受けている幼稚園へ、まず最初の子がにこにこやってくる。『梅一輪一輪ずつのあたたかさ』ふと、こんな古句が思い出される。一人来て、二人来て、だんだんと春めいてくる幼稚園の朝である。ふらりふらりと、あとから来た子。先きにきて遊んでいる子等の、あの群、この群へ誘われて、思い思いのところに、思い出の春を見つげる。『梅おちこち南すべく北すべく』またこんな古句も思い出される。幾つもの群が出来、だんだん春めいてくる幼稚園の朝である。それにしても、どこから来るこの春の匂いであろう」（育ての心より）

これは正に無韻の詩ではないか。想うに、先生は天成の詩人であつたらう。その方面へ進まれても嶄然頭角をあらわして、優に一家を成したであらう。

先生自身「保育者は詩を解さねばならない」というような

ことをしばしばいわれたようである。

まことに詩の心の乏しい、芸術に縁の遠いものは、理想的な保育者とはいえないだろう。なんとすれば幼児は詩的であり、芸術的だからである。しかもその傾向は伸ばされねばならないからである。

倉橋先生は保育者であり詩人であった。

因みに、私は、戦後、郷土のこゝ鹿沼で幼稚園を開くことになったが、そのことを先生に申しあげると「開園の時はいつてやろう」とおっしゃった。それが予定よりおくれ、二十八年四月になった。先生はその前に足を痛められて、地方へはお出かけにならなかったが、奥さまとごいっしょにおいで下さった。その後、関西へお出かけになったのが、地方出張の最後だったと思う。とすれば、鹿沼行は最後から二番目だ。まことに有難く記念すべきことである。

その時、御講演の中で、先生はこういわれた。「私は上沢さん一家を保育一家といたい。上沢さんも私は多年保育を通じて関係があり、奥さんも私の講義を聴き、お嬢さんは私の教え子だ」と。

私はこのお言葉を忘れない。忘れないどころか、採って以て一生の箴どししたいと思っている次第である。

（鹿沼幼稚園）